ウェズレー・C・ミッチェルの経済思想史観

齋　藤　宏　之

Ⅰ　制度学派の伝統とミッチェルの経済思想史研究

制度学派はアメリカ合衆国で1900年頃に成立し，爾来，経済思想に顕著に貢献してきている[1]．この学派の「三人の大立者[2]」は，ソースタイン・B・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen），ウェズレー・C・ミッチェル（Wesley Clair Mitchell），ジョン・R・コモンズ（John Rogers Commons）である．制度とは，ヴェブレンによれば，「実質的には世間一般の思考習慣であり，この習慣は個人と社会との特定の関係ならびに機能に関わっている[3]」し，またミッチェルによれば，「広く行き渡っている高度に規格化されている社会習慣のなかでも，比較的重要なものを便宜的に呼んだにすぎない[4]」し，そしてコモンズによれば，「集団活動であり，これが個人活動を支配し解放し展開している[5]」のである．

ミッチェルはこう述べる．

「社会概念は，社会制度の核心である．社会制度は世間一般の思考習慣に過ぎず，この習慣は，行為を導く社会規範として世間に認められている．この形で社会概念は，個人に長年の慣例により認められた一定の権威を握っている．社会集団に属する全成員が，社会概念を日々利用することによって，個人は絶え間なく知らぬ間に共通の型に形成される．独創的に活動したいと望んでも，進路に障害が置かれることもよくある[6]．」

制度派経済学者は，制度が経済生活を規定すると考える．制度は，個人の行動形態に大きな影響を及ぼす．それゆえ経済生活において制度の演ずる役割を重要視する．したがって制度がどのように変化し，どのように機能するか分析する．この際，同様に制度分析を重視するジョン・デューイ（John Dewey）のプラグマティズムや社会心理学を援用する．これとの関連において，快楽心理学や効用極大化の考えを拒否する．経験的方法の見地から，正統派理論が抽象的に理論を立てることを非現実的かつ不毛と非難する．そこで「市場価格が個人的・社会的厚生を適切に示しており，未規制の市場によって資源を効率的に配分し，所得を公平に分配することができるということを否定し[7]，」市場への政府介入を含め，新しい形態の社会統制が必要であると主張する．

ミッチェルは，自身を導く如上の制度学派の基本的な考えを，経済思想の成長を発生論的にたどることによって補強するに至った．その成果は，学生が言葉通り正確に書き留めた講義ノート『経済

1) Cf. Geoffrey M. Hodgson, “The Revival of Veblenian Institutional Economics,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 41, No. 2, June, 2007, p. 325.

2) Jacob Oser, *The Evolution of Economic Thought* (New York: Harcourt, Brace & World, 1970), p. 329.

3) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions* (New York: Augustus M. Kelly, Bookseller, 1975), p. 190.

4) Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950), p. 373.

5) John R. Commons, *Institutional Economics: Its Place in Political Economy* (New Brunswick: Transaction Publishers, 1990), Vol. 2, p. 842.

6) Wesley C. Mitchell, “The Rationality of Economic Activity, Part Ⅱ,” *Journal of Political Economy*, Vol. 18, No. 3, March, 1910, p. 203.

7) Stanley L. Brue, *The Evolution of Economic Thought* (Fort Worth: The Dryden Press, 2000), p. 396.

理論の諸類型――重商主義から制度主義まで――』（*Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*）に見て取れる．この著作が暗示しているのは，ベン・セリグマン（Ben Seligman）によれば，「ミッチェルが終生ずっと心に決めていた理論に関する著作を執筆していたなら，それは偉大な研究となったのは疑いのないことである．ジョゼフ・A・シュムペーター（Joseph A. Schumpeter）の『経済分析の歴史』（*History of Economic Analysis*）と比べても遜色はなかったであろう[8]」ということである．それゆえヘンリー・W・スピーゲル（Henry William Spiegel）は，『経済理論の諸類型』は「シュムペーターの著『経済分析の歴史』が出版されるまで，アメリカの優れた経済学者が研究した学説史の発展の唯一の記録であった[9]」と述べている．『経済理論の諸類型』において，ミッチェルは経済思想史を貨幣経済制度の発展と関連づけ，金銭制度が思考習慣に及ぼす影響を考察した．観念と時代の経済・社会問題との関係に注目し，経済理論に関して最も重要でありながら見逃されがちな事実，すなわち経済理論は社会の発展が形作る点を次のように指摘する．

「経済学者たちは，自らの研究は論理的に立てられた問題に対して，思考力を自由に働かせることから生まれると考えやすい．……しかし自由な思考力は，自らが成長してきた環境が陶冶したとは認識しない．つまり自分たちの思考は社会が生み出すとか，いかなる重大な意味においても環境を超越することができないとはめったに認識しない[10]．」

8）Ben Seligman, *Main Currents in Modern Economics*（New Brunswick: Transaction Publishers, 1990）, p. 193.

9）Henry William Spiegel, *The Growth of Economic Thought*（Durham: Duke University Press, 1991）, p. 635.

10）Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*（New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1967）, Vol. Ⅰ, pp. 36-37.

そこでミッチェルは，その著『経済理論の諸類型』第一巻のなかの第7章「勝利の時代の政治経済学」（Political Economy in the Days of its Triumph）において，リカード類型に対抗する非正統派の諸類型の推移を概観した．リカード類型が勝利し，政治経済学は1817年から1848年にかけて名声を高めたけれども，進歩していなかった点を明らかにしている．この理由を社会状況・制度を考慮して解明していくことによって，ミッチェルの経済理論に対する態度を確定し，彼独自の制度主義の思想を本質的かつ首尾一貫して捕らえる手掛かりを得たい．

Ⅱ　勝利の時代の政治経済学

ミッチェルの所説によれば，1817年から1848年にジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill）がその著『経済学原理』（*Principles of Political Economy*）を公刊するまでの間，政治経済学の名声は高まった．それは，経済学者が唱道していた方策が採用されたことによる．とりわけ1846年に穀物法を事実上廃止したこと，また全国的な繁栄によっても高まった．「……一般の人々からみると，政治経済学は無味乾燥で人を寄せつけず融通がきかなかったであろうが信頼できた[11]．」

経済学者は大衆の支持を最大限獲得した．資本家的雇用主は，経済学者が主張した方策を認め，権力を益々行使するようになっていたからであった．国を繁栄させるには，利潤を増大させなければならないという立場を，デイヴィッド・リカード（David Ricardo）は擁護した．リカードに古典派経済学者たちは同意した．当然視されたことは，雇用者階級が立法化されるのを望む方策を防御するように社会の階級関係の分析を変えることである．また自称賃金所得階級の代弁者が唱道する学説を論破することに分析を変えることも，説得する必要はあまりなかった．古典派政治経済学，

11）*Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 506.

特にトマス・ロバート・マルサス（Thomas Robert Malthus）の名と結びつけて考える学説は，使いやすく安心感を与えた．労働者が，自分自身の悲惨な貧困を招いたことを証明したからである．正統派政治経済学は，資本家ばかりでなく地主の役にも立った．労働者階級が労働組合を結成し，雇用主からよりよい条件を強引に引き出そうとすることによって，より高い賃金を獲得しようとしても不首尾に終わる運命にあることを賃金基金説によって証明した．正統派政治経済学は，自由放任の理論に具体化されると，工場法や政府による企業への干渉に反対することを合理的に説明する際にも使うことができた．経済学は，権威のある社会科学として，その発展に最も関心をもっている階級が受け入れつつあった．政治経済学はこのように成功し，承認を得ていたにもかかわらず，その進歩は遅々としていたとミッチェルはいう[12]．彼はこう述べる．

「政治経済学の進歩は表面的に認められてはいたが，科学的独創性に乏しい時期であった．……リカードの著『経済学および課税の原理』（*On The Principles of Political Economy and Taxation*）の発行後に続いた一世代における経済学の出版物を取り上げるなら，後に経済学において発達した実りある考えのほとんどの発端をみいだすであろう．しかしこの考えは，ほとんどまったく，非正統派の源から生じた．注意はほとんど払われなかったし，隠れた示唆に留まったのが大部分であった[13]．」

リカード類型は，個人ならびに政府が何をすることが利益となるか，若干の公理に基づいて抽象的に分析する．経済学においては，リカード類型に対抗する他の諸類型が生まれた．ミッチェルは，それらの主要な諸類型の特徴を簡潔に指摘する．

ミッチェルのみるところによれば，異端の諸類型のなかで最も重要なものは，いわゆる現実的な類型であった．マルサスの著『経済学原理』（*Principles of Political Economy*）がよい例となる．これは抽象的なリカード類型に対立していた．マルサスは，統計を利用しつつ，自分が直接観察し，それに基づいて経済理論を可能な限り構築しようとしたが，満足な結果につながらないがゆえに，彼の態度は誤っていると考えられた．

ミッチェルは，トマス・チャーマーズ（Thomas Chalmers）が幾分マルサスの方向に従っていたのをみいだす．マルサス流の人口・地代に関する理論を，農業をめぐる重農主義的概念ならびに賃金生存費説と結合させた．経済学研究の要所は「耕地の限界」にあった．

リチャード・ジョーンズ（Richard Jones）は，いわゆる比較歴史分析を応用することから始めた．教会の十分の一税を調整する問題に精力を費やし，十分の一税保持者と寛大に合意することを支持した．ミッチェルは，ジョーンズが富の分配に関係する制度を研究することに着手したとし，ジョーンズとリカード類型の相違を指摘する．まずジョーンズの類型は，リカードと異なり，実際の支払いを説明することをもくろんでいる．またジョーンズの方法は，事実を観察することに基づいているのに対し，リカードの方法は仮定から演繹することに基礎を置いている．さらに資本主義組織以外を考慮に入れている点で，ジョーンズの研究領域の方が広い[14]．

それでまたミッチェルは，他に的確な名称がないので，社会主義理論といわざるを得ない類型が，特にウィリアム・トンプソン（William Thompson）とトマス・ホジスキン（Thomas Hodgskin）の仲立ちで著しく発展したという．「トンプソンは，ジェレミー・ベンタム（Jeremy Bentham）の功利主義学説を受け入れて，自身の分析に利用し，労働の全生産物は，産業で生産したものの全価値を含めて，労働者に賃金として渡るべきであるこ

12) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 506-508.
13) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 508.
14) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 511-512.

とを証明した[15].」

そしてミッチェルは，ジョン・R・マカロック（John Ramsay McCulloch）を取り上げる．マカロックの結論においては，時間は商品の価値を評価する際，考慮に入れるべきではない．考慮に入れるとすれば，時間に言及する必要があるときだけである．その目的は，商品の生産に必要な労働量を確かめることであるとミッチェルは述べ[16]，次の見解を呈示する．

「ホジスキンは，このミル＝マカロックの見解を取り上げ考えた．結局あらゆるものの価値はリカードの考えに従って決まる．しかし自由に再生産可能な財の価値は，長い目でみれば費用によって決まる．ジェームズ・ミル（James Mill）とマカロックは，その法則を校訂したが，これを受け入れて，専門的にかつ可能な限り精巧に，トンプソンが行ったように，価値は常に労働者に与えられるべきであると続いて主張し始めた[17].」

リカード派社会主義者は，前提，問題あるいは方法の構想よりもむしろ，結論が支配的な学派とは異なっていた．労働価値説を利用して，労働に対して全生産物を要求する．社会主義的結論を得ようとして，功利主義学説と最大幸福を利用した．

ウィリアム・ヒューエル（William Whewell）は，その論文において，リカードの法則を数学的に表現する．しかしこのように表現することは，リカードの公準のゆえに役に立たないと断言する．ヒューエルが数学の系統上で行った様々な研究は，フランス人のアントニオ＝オーガスティン・クールノー（Antonie-Augustin Cournot）がまもなく巧みに展開した．またジョン・レイ（John Rae）は，経済理論の「社会的価値」を開発した[18].

ミッチェルは，さらなる別の類型の代表者として，スコットランド人のG. J. D. ポレット・スクループ（G. J. D. Poulett Scrope）に着目する．スクループは，総需要の変化，物価下落が総生産に及ぼす悪影響，マルサスの人口学説ならびに救貧法の全面的な改善に対する現時の提案の謬見を明らかにする．正統派経済学者とは方法よりも結論が異なる．スクループの結論は，技術の進歩を信頼することに由来し，地球全体を世界主義的に考察する[19].

そして限界効用の概念が発達し，その概念を価値の説明に応用することが始まった．これは，マンティフォート・ロングフィールド（Mountifort Longfield）とウィリアム・フォレスター・ロイド（William Forester Lloyd）の諸著作に看取できるとミッチェルはいう．ロングフィールドは，経験に懇請することは惑わせ，活動中の原因も多様であるから，綿密に推論することが唯一の信頼できる道標であるとする．経済理論は，活動のいかなる方向を経済的利益が定めるかを述べることとなる．これらの利益が明白に認識されるにつれて，理論は益々事実に一致するようになる．これらすべての点で，ロングフィールドはリカードの系統に沿って進歩している．ただ若干のリカードの誤りを付随的に訂正している．ロングフィールドの研究を特色づけるものは，限界の考えを導入して需要を分析することであるとミッチェルはいう[20].

価値を支配する要因として限界効用を明確に考えることは，ロングフィールドが業績をあげていたのとほぼ同時期に，ロイドが，ベンタム同様，効用逓減を考慮しつつ『効用からばかりでなく交換価値からも区別できる価値の概念に関する講義』（*Lecture on the Notion of Value as Distinguishable Not Only from Utility, but Also from Value in Exchange*）において行った．

ミッチェルは，リチャード・ジェニングズ（Richard Jennings）のいう「心理学派」を限界

15) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 514.
16) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 515.
17) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 515-516.
18) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 516-517.
19) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 518-520.
20) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 521.

分析の異形の先駆者と捕らえる．ジェニングズは，資本の不効用逓増の考えを明確にした．貨幣は，価値の静態現象を価格に，価値の動態現象を利子率に表すと考えた．

さらにミッチェルは，カーネル・トレンズ（Colonel Torrens）に，後にハーバート・J・ダヴェンポート（Herbert Joseph Davenport）が展開することとなった「金銭的経済学」の予示を看取する．資本費用を金銭的に分析する．そして紙券通貨に対する理論的関心の核心は，貨幣価値の上昇や下落が，賃金，利潤，地代，債務者や俸給生活者の利害にどのような影響を及ぼすかを鋭敏に分析することにある．

トレンズの価値の資本費用理論は，リカードの最も忠実な追随者であるジェームズ・ミルやマカロックの批判に備えているが，トレンズの理論を志操堅固に支持したのがサミュエル・ベイリー（Samuel Bailey）であったとミッチェルは考える．

またミッチェルは，いわゆる社会学派にも注意を促す．この学派の代表者は，フランスのオーギュスト・コント（Auguste Comte）ならびに合衆国のヘンリー・C・ケアリー（Henry C. Carey）であった．政治経済学は，科学としては精密ではあり得ない，むしろ科学ではあり得ないと考えた．それゆえ健全な社会学をもたねばならないとした[21]．

厚生経済学は，トマス・カーライル（Thomas Carlyle）が最初の代表とミッチェルは捕らえる．その後の代表は，ジョン・ラスキン（John Ruskin）であった．これらの道徳主義者は，自らを政治経済学の敵とみなした．その道徳主義者には，チャールズ・キングズリー（Charles Kingsley）もいた．道徳主義者は，政治経済学を功利主義者やマルサス主義者の産物であるがゆえに嫌った．政治経済学の敵には感情家もいた．代表者は，チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）であった．とりわけ，新救貧法や貧民収容施設が無慈悲なことで嫌悪感を抱いた．またロバート・オーウェン（Robert Owen）らの社会主義者も含む．

制度派経済学の予示は，パーシー・ラヴェンストーン（Piercy Ravenstone）の著『人口ならびに政治経済学の問題に関して一般的に考えられた若干の意見の正しさに関するいくつかの疑念』（*A Few Doubts as to the Correctness of some Opinions Generally Entertained on the Subjects of Population and Political Economy*）にみいだすことができる．ラヴェンストーンが立てた貸付信用論は，ヴェブレンの理論の原型をなしている．「ラヴェンストーンの二冊目の有名な著作『公債資金調達法とその影響に関する所見』（*Thoughts on the Funding System and Its Effects*）は，ローダーデール伯爵（Earl of Lauderdale）の著『公富の性質ならびに起源に関する一研究』（*An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth*）の見解の方向に沿っていた．この著作は，政府の負債償還政策を非難した．この政策により『消費』が減少し，その結果人々は豊かさのなかにあって飢えているようにみえたからであった[22]．」ラヴェンストーンの類型と緊密に関係しているのは，トマス・ロウ・エドマンズ（Thomas Rowe Edmunds）の『現実的，道徳的，政治的経済学』（*Practical, Moral and Political Economy; or the Government, Religion, and Institutions Most Conducive to Individual Happiness and to National Power*）である．

ミッチェルは，非正統派の類型の結末を確認する．黙殺され，すぐに忘れ去られた類型もあった．効用分析，ジョン・レイの考え，クールノーの経済学の数学的類型である．非建設的な形で残っているものもあったが，それは正統派政治経済学の範囲ならびに価値に対する批判としてである．歴史的研究，カーライルの主張である．正統派経済学に対する対抗者の発展において波瀾万丈であっ

21) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 526-527.

22) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 528-529.

たが，あまり世評に上らなかったものもある．社会学と社会主義である[23]．ミッチェルは,「正統派の理論に組み入れられた類型はなかった[24]」という．これら非正統派の類型の示唆は，数多くの近代の類型のおぼろげな先駆者として重要に思えるが,「しかし，当時役に立たない道のうえにいるとみなされていた．その道をたどったところでどこにも行かないからであった[25]」と述べる．

これらの様々な理論の類型のなかでも，リカードの理論は，承認を得ようとする闘いにおいて勝利を得た．その理由としてミッチェルは，経済現象を説明するという現時の要求に最もかなったことをあげる．これらの要求は，当時の若干の時事問題をめぐってどうすべきか知りたい，その要求であった．あるいは自分たちが行いたいことに対して理由が欲しい, その要求であった．これらは，救貧法，穀物法，自由貿易，工場法に由来していた[26]．ミッチェルはこう述べる．

「提案された政策を導き擁護するものとして，理論が必要であると考えるのは，商業階級ならびに製造業階級であった．貧民者は理論を洗練しなかった．地主は，主義として，理論から離れて経験に訴えた．労働者階級は，何よりもまず，政治闘争に身を投じた[27]．」

労働者は, 政治改革に注意を集中していた限り，経済理論にはあまり関心がなかった．商業階級ならびに製造業階級は教育を受けていた．議論を頼りに通した主張は，経済的性格を帯びていた．経済学におけるこの嗜好ゆえに，リカードのブランドを最も好んだ．ミッチェルは，資本家的雇用主がリカード類型を支持する理由をさらにこう解明する．

「マルサスに関しては，その人口論が受け入れられた．それが示したことは，労働者階級は，低賃金に関する責任は自分自身にあるとしたことであったし，院外救援を制限することと救貧院の調査を実施することによって救貧税を減少させることは，賢明な慈悲心によって必要があると感じられた．しかしリカードは，マルサスの研究のこの部分を受け入れた．……一般理論に関するマルサスの専門書がリカードと考えが一致している限り，マルサスは無用であった．リカードの方が簡潔で明確であった. 正確でよりわかりやすかった．マルサスの著『経済学原理』がリカードと異なっている限り，マルサスが誤っていた．特にマルサスは地主側と穀物法を擁護した．さらにマルサスは，理論基準として習慣的に常に『経験』に注意を向けた．これはトーリー党の思うつぼにあまりにもぴったりとはまった．経験は信頼できなかった．自由貿易などを論証するために，思考力に頼らざるを得ない．リカードが行ったようにである[28]．」

トンプソンと「労働著述家」は，ミッチェルの考えでは，誤ったことを証明したがゆえ注意する価値はない．資本主義的社会では広範に注目される機会はなかった．ジョーンズは，イングランドにおける穀物法の存廃をめぐって地主に賛成しすぎる．歴史派経済学は教授たちの意にかなう．実務家は歴史を研究する時間がもてない．スクループは，マルサスの人口論を批判し，労働者階級は貧困に対してとがめられるべきではないとした．ロングフィールドとロイドは，成り行きとして起こる自分たちの結果が現実的に導き出され，受諾できる最終的な結果に導いていくことを示さなければならなかった. ロイドは限界効用を考えたが，それは発達しなかった．ロングフィールドの概念では，賃金はその生産物の割引価値である．その概念が役立つ武器であることを証明するのは，雇用主が労働組合に直面するときである．しかしそれは，地主に対立する資本家には役立たない．救貧法には関係していなかった．工場法が不条理で

23) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 530.
24) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 530.
25) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 530.
26) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 530.
27) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 530-531.
28) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 531.

あることを示すことはなかったとミッチェルはいう[29]．

ミッチェルによれば，リカードは，これに反して要求を満たした．人口あるいは救貧法に関しては，危なげなかった．穀物法論争においては，地主側に敵対して利潤を得る階級の偉大な擁護者であった．リカードの理論に基づいて，門下生たちは工場法に強く反対し，労働組合が無駄であることを証明した．それゆえリカードというよりむしろ門下生たちが，教授すべき重要な真理をもっていた．彼らは，良識ある人たちが受け入れた政治経済学者のなかの政治経済学者であった[30]．ミッチェルは次の見解を披瀝する．

「リカード自身より，その門下生を読む方がよかった．誤りがなかったし，理論を時事問題と接触させていたし，理解しやすかったからであった．そこでリカードは，偉大な科学の権威者として黒幕に控えさせられえた．疑惑を抱くと，難なくその権威者のせいにできるのが常であった．疑惑を抱いても，リカードを読もうとしなかったからであり，たとえ読んだとしても，正しく理解したとはいえなかったからであった[31]．」

如上の理由で，リカードの類型は勝利を収めた．経済学者のなかで，リカードの問題にリカードの方法で取り組んだものは，1823年にはすでにかなりいた．その数は次の世代には急速に増大した．経済理論は，ジェームズ・ミル，マカロック，ロバート・トレンズ（Robert Torrens），ナッソウ・シーニア（Nassau Senior）が進めた．さらにそれ程大きな影響力をもたない小集団も進めた．この小集団は，ミル，マカロック，トレンズ，シーニアと共に，正統派の代表者であるという肩書きを享受した．これらの経済学者はリカードを自身の師として受け入れた．しかし価値ならびに分配の理論を立てる際，様々な校訂を行った．この学派は急速に合併し，途方もなく強力な名声を獲得した．ミッチェルのみるところでは，「自身を政治経済学のひとつの類型とみなしたのではなく，政治経済学自体を真正な形で代表しているとみなした．その支配は非常に優勢で，経済理論のその他の類型をまったく覆い隠すほどであった[32]．」リカードが亡くなって，ジョン・スチュアート・ミルの偉大な専門書が世に出るまでの期間の大部分，経済学は重きを成す人に高く評価された．さらに公共政策の信頼できる権威のある指針として益々期待され，その提案は，国家政策の土台として次々と採用された．大学で教授されるようになり，高等学術機関に行かない階級にも，若者を教育することや大衆向きの講座を通して普及したとミッチェルは述べ[33]，次の見解を披瀝する．

「しかし経済学は，それでもほとんど進歩していなかった．創造的に活動することは，マルサスならびにリカードが生きている間に発生した．この後に続いたのが，長期にわたる独断的な無活動状態であった．示唆に富む考えは非正統派の源泉から生じたが，古典派政治経済学には編入されなかった．独断的歴史の見地から，一般的にいって，二流の人々の時代であった．しかし独断的歴史の見地は，自ら自覚している者を満足させない．経済理論が発展することを，大変有望な社会的企てであり運動でもあるとみなすと，その時代は関心事と教訓に満ちている．これほど多くの新しい考えが示唆されたときはなかった[34]．」

ではなぜ経済理論があまり発展しなかったのか，その理由をミッチェルは，独断的歴史ではなく社会状況にみいだし，こう述べる．

「理由のひとつは，経済学者は，公に議論する際，形式的な根拠に基づいて自分の理論を擁護しなければならない立場に至るにつれて，学説が不適切であることが論証されたのに，批判に対して不幸

29) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 531-532.
30) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 532.
31) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 532.
32) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 534.
33) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 534-535.
34) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 535.

な結果となる一連の防御を採用した．経済学は，当時，厳密に論理的な様式で，仮説に基づいて一連の議論を行うとみなされていた．しかもその議論は，若干の前提のうえに打ち立てた．経済学者が達した結論が正しいかどうか疑われると，経済学者なら述べたであろうことがある．『勿論，私は引き合いに出された事実は理論と一致しないことは認めるが，理論は仮説的に構築したものであることを想起しなければならない．理論は若干の仮説に基づいている．これらの仮説から首尾一貫して推論することによって，理論は演繹できる．それゆえ理論は真である．事実が理論に一致していないことは，現実の生活に流布している状況が仮説的前提に緊密に一致していない状況であることを意味するにすぎない．そして経済学者は，その前提に基づいて推論してきた[35]．』」

ミッチェルは，これが今日に至るまで経済学者が取り続けている論理的立場であるという．政治経済学をこの種の見解を主張することによって守らざるを得ないとき，進歩に対する最も重要な刺激を見逃しているとし，ミッチェルはさらに傾聴に値する見解を述べる．

「つまり，社会状況の重要な事実には当てはまらない結論に導く理論を抱く経済学者は，経験を説明するうえではあまり役に立たないように思える理論に満足していた．経済学者は自分たちの偉大な師が与えた模範に背いた．すなわち，アダム・スミス，マルサス，リカードであった．なるほどこれらの師たちの推論は，論理的見地から，若干の仮定に基づいて打ち立てる．これらの仮定は，世界全体に流布する状況に一致するかもしれないし，一致しないかもしれない．しかしこれらの師たちは，経験を説明するのに役立たない理論をほとんど必要としなかった．彼らの見解によれば，推論する場合，使用すべき仮定は，少なくとも，現実の生活の重要な特徴に実質的には一致していなければならない．その目的は，結論が公共政策を論じるうえでの妥当な指針となるであろうことであった．これらの師たちは，論理的にはどんなに完璧であっても，国家が，例えば，外国品の関税，貨幣問題，労働組合，貧民に関してどうすることが賢明であるのか決定する助けとならない理論に満足していないのは確かであった．彼らの理論は仮説的であったかもしれないが，仮説はそれに基づいて彼らが論ずると，社会的には重要であった．その意味は，彼らは，大まかにいえば，社会状況に応じたということであった．しかし門下生たちは，法則の意図や精神よりもその字句に従った．一般的な観察に反するときですらそうであった．経済理論でも，門下生たちが欲した類型は，同時に，その師たちが与えた模範に反していた[36]．」

経済学者は，このような自己防衛の技巧を用いた．このことが理由のひとつとなって，ミッチェルの分析によれば，経済学者は力強く突き進まなかったし，表面化してきた問題を首尾よく論じようとしなかった．

みられるように，経済学はこの時期独創性がなかった．ミッチェルは，このことに対する第二の理由を解明する．学説は至る所で極度に利用されるようになった．アダム・スミス，マルサス，リカードの経済理論は，公共政策を最も安全に導くものと認められていた．経済理論の彼らの著作を，一種のバイブルとして引き合いに出し，その著作から門下生たちが同意できるような結論に達し，科学でも，そのような見事な結論に導くものは，勝手に書き換えるべきではないという見解をもたせた．とりわけ穀物法を解体し，新救貧法を正当化し，労働組合は労働者にとっては役に立たないことを示すために，経済学を利用する場合である[37]．ミッチェルはこう述べる．

「政治経済学の理論をこのように極めて現実的に利用したいなら，宣伝者の目的には，政治経済

35)　*Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 535.

36)　*Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 536.

37)　*Ibid.*, Vol. Ⅰ, pp. 536-537.

学の教義を，不変性，すなわち法則を帯びた性格によって生じたものとみなし，これらの法則のなかで最も重要なのは，すでに発見されていると主張し，政治経済学全体を発展途上の科学ではなく，一団の確立した学説とみなす方がよいことが分かった[38]．」

したがってミッチェルは，経済学は一団の確立した学説として論ずるなら，現実的な宣伝者として益々強くなるだろうが，理論研究としてははるかに脆弱になるだろうと捕らえる．科学を成長させるには，新たな批判を受けなければならないし，伝わってきた政治経済学にいかなる限界が本来備わっているかみいだそうとしなければならないし，偉大な先駆者の研究を容赦なく懐疑的に批判しながらみなければならない．そのようにひたむきに批判することは，リカード以降の世代，経済学に関心をもっている大多数の人たちのなかにはみいだせない．経済学説は事実と食い違っているようにみえても，それを擁護すべく用いられた過程のゆえに，アダム・スミス，マルサス，リカードが開始した研究を整合する方向に向かって成し遂げられるものはほとんどなかったとミッチェルは考える[39]．

Ⅲ　ミッチェルの制度主義的思想史観

これまでみてきたミッチェルの見解を検討すべく，彼の所説をここで整理しておくこととする．

ミッチェルは，リカード類型に対抗する非正統派の類型の結末を確認する．効用分析，社会的価値学派，経済学の数学的類型は黙殺された．比較歴史研究，厚生経済学は，建設的な形では残っていない．社会学と社会主義理論は，世評にはあまり上らなかった．非正統派の源泉から生じた考えは示唆に富んでいたけれども，正統派の理論に組み入れられることはなかった．

様々な理論の類型のなかでも，リカードの類型は勝利を収めた．その支配は優勢で，経済理論のその他の類型を覆い隠すほどであった．経済現象を説明するという要求を満たしたからであった．これらの要求は，権力を得つつあった資本家的雇用主から生じた．救貧法，穀物法，自由貿易，工場法に関連していた．こうして政治経済学の名声は，1817年から1848年にかけて高まった．

しかしながらミッチェルのみるところでは，政治経済学は，ほとんど進歩していなかった．まず経済学者は，形式的な根拠に基づいて自分の理論を擁護する立場を採用することによって，進歩に対する重要な刺激を見逃したからであった．またアダム・スミス，マルサス，リカードの経済理論の著作を，一種のバイブルとして引き合いに出し，書き換えるべきではないという見解をもったからでもあった．リカード以降，政治経済学に関心をもっていたとしても，その限界を明らかにし，先駆者の研究を批判的に検討することによって，成長させようとはしなかった．

翻ってセリグマンに従えば，「ミッチェルが経済理論に対し態度を取れば，……それは道具主義的であるということだけである[40]．」ミッチェルは，理論であるなら，制度と行動とがどのような関係であるか，その輪郭を示すと考える．

制度派政治経済学は，アメリカのプラグマティズムの影響を受けてきた[41]．それゆえアラン・G・グルーチー（Allan G. Gruchy）は，「……制度主義者は1929年以降ヴェブレン主義者というよりむしろデューイ主義者であった[42]」と指摘している．

38) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 537.
39) *Ibid.*, Vol. Ⅰ, p. 537.
40) B. Seligman, *op. cit.*, p. 192.
41) Philip Anthony O'Hara, William Waller, "Institutional Political Economy: Major Contemporary Themes," in *Encyclopedia of Political Economy*, edited by Philip Anthony O'Hara (London: Routledge, 1999), Vol. 1, pp. 528-529.
42) Allan G. Gruchy, *The Reconstruction of Economics: An Analysis of the Fundamentals of Institutional Economics* (New York: Greenwood Press, 1987), p. 12.

実際のところミッチェルの考えには，ヴェブレンよりむしろミッチェルが哲学の師[43]と仰ぐデューイの影響が見て取れる．かくしてジェームズ・R・ワイブル（James R. Wible）は，デューイの道具主義哲学は，ミッチェルを含め制度派経済学の典型的な哲学上の構成要素と認められているとし，デューイこそがミッチェルらの制度派経済学に最大の影響を与えたと考えている[44]．事実ミッチェル自らも，人間性ならびに人間性と社会との関連をめぐる最近の見解の発展に，デューイほど影響を及ぼしたものはいないと捕らえている[45]．同様に「建設的に理論を立てることを一度試してみたいと思うなら，〔どう考えるか〕というデューイの概念は方向性を示した[46]」と述べ，知識論と人間性・人間行動の理論との緊密な関係を重視しつつ，社会科学が入りつつあるようにみえた道筋をデューイが指摘した点に着目している[47]．こうしてミッチェルは，デューイが展開した見解を受け入れ，彼の思考に関わる分析を経済学に適用したときのその思想の革命性を感じ取っている．プラグマティックな哲学上の土台をデューイから獲得している．

デューイの説明によれば，社会集団すべての成員たちの心は環境が作る．環境のなかで心が発達するからである．そして心を作る際，最も影響力のある要因は，他人の心である．個人は誰でも，成長する際，何よりもまず，まわりの人々の影響を受けて，いまの自分になるからである．まわりの人から，その人が知っていることを学び，どのように考え，感じ，活動するか，その習慣を身につける．デューイが強調したことは，習慣を理解することが社会心理学の鍵であるということである．デューイは,「社会心理学以外, 心理学はない」と好んで述べたといわれている[48]．デューイにとって，習慣は手段であり，それによって，活動したいという生得的な衝動が指図される．

ミッチェルも，人間の意識を文明のある水準で理解することが重要であるとし，次の見解を披瀝する．

「知性は，社会が生み出すのがほとんどであるから，人間が生まれる世界は，神経単位のなかで，つながりを多く前もって形作っている．このつながりは，生まれた時点ですら，ある明確な反応をする準備があることを表している．生まれながらに，また，神経単位を新たにつなぐことができる．どのようにつなぐかは，有機体として経験が決定するのが主である．とりわけ，他人との経験のなかで，知性を形成することに結びつくとそうである．結果として，誰であれ，誕生したときから，その心は，極めて文字通りの意味で，厳密な生理学上の意味ですら，親兄弟，少し後には，接触するようになる子供や大人が形成するようになる．学校では，このように接触するのをさらに拡大させる．こうして子供は，６歳だろうが８歳だろうが10歳だろうが，何歳であれ，その子が成長してきたなかにいる人たちが作り上げるのが普通である．価値体系は，知性が生み出すもののなかのひとつである．心を形成する一部分である．また社会的要素を特徴としている．その要素は心に影響を与える．その点，知性の他の部分に影響を与えるのとまったく同じである[49]．」

制度は，社会生活の実体である．活動は，社会

43) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism* (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969), Vol. Ⅱ, p. 120.

44) James R. Wible, "The Instrumentalisms of Dewey and Friedman," *Journal of Economic Issues*, Vol. 18, No. 4, December, 1984, p. 1051.

45) W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. Ⅱ, p. 450.

46) "Letter from Wesley C. Mitchell to John M. Clark," August, 9, 1928, in John Maurice Clark, *Preface to Social Economics: Essays on Economic Theory and Social Problems* (New York: Augustus M. Kelley, 1967), p. 411.

47) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 410.

48) *Ibid.*, pp. 78-79.

49) W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory*, Vol. Ⅱ, p. 467.

的文脈で組織化されると，習慣的になる．それゆえミッチェルは制度を考察して，習慣がどのように形成されるか理解する．制度を研究することによって，体制全体を考慮して，習慣化した活動の土台を考察する．

制度は個人の思想とどのような関連があるか，ミッチェルは示唆し，経済生活で習慣的活動がどれほど重要であるか強調する．制度は，規格化した行動形態であり，それ自体心理的な実体である．つまり観察中の社会で支配的な感情，思考，および活動の習慣である．習慣において人間と環境とは均衡する．ただし要求が満たされていなければならない．

ミッチェルの考えでは，経済理論家でも，思想の発展のなかで最も大きな影響力をもっているものは，同世代の人々を悩ませた問題に深く関わっており，これらの問題を科学的に論じ，現実の活動に対して有望な手段を示してきた[50]．思想は，その時代の主要な経済・社会問題に依存していると同時に，事の成り行きに影響を及ぼす．

ミッチェルは，偉大な経済学者がどのように考え活動したか，歴史的に検討する．専門的な経済理論にはあまり注意しない．その代わりに，観念が時代の主たる経済・社会問題にいかに左右されるか，また出来事の過程にどのような影響を及ぼすかを重視する．経済思想と政治・道徳哲学が相互に依存していることも示した[51]．グルーチーが述べたように，理論よりも経済理論家を説明していた[52]．

翻ってリカードの類型は，支配階級から生ずる要求を満たすべく，経済現象を説明した．リカード以外の非正統派の類型はほとんど注意されなかったし，政治経済学の進歩も遅々としていた．衝動は，社会環境が活性化していないので，顕在化しない．要求水準は低下し，積極的行動はみられない．今日の信頼できる思考がうまくいっていることが判明すると，それが明日の日常の過程を準備するとミッチェルは捕らえる[53]．

個人の認知過程は後天的に得た習慣が作る．習慣は，共同社会において，学習され流布するので，心は，個人が共同社会に関与することによって作られる．活動と認識は社会的である．心が意識的に用いられるのは，習慣的行動が，有機体と環境との間に調和を保持することができないときだけである．それゆえ確立した習慣が新しい経験と衝突することがなければ，換言すれば，習慣的行動が役に立っていれば，活動と認識は作られない．すなわち洞察性が新たに作り出されることはない．洞察性は，習慣・信念，それらと関連した行為様式における問題と衝動的変化を取り除くからである．習慣は，永続性があって過去を志向し，それ自体変化に抵抗する[54]．社会の習慣を模倣したり強制したりすることによって，個人は，調和した行動パターンを身につけるようになる[55]．この行動が，個人の習慣の端緒となる．これらの習慣のおかげで，同一の行動パターンが集団のなかで持続する．

ジルベルト・T・リマ（Gilberto Tadeu Lima）は，こう述べる．

「因習は，概して，自己を動機づける衝動と定義することができる．以前に選択した活動方針に従うからである．因習は，複雑な日常生活を扱うのに欠くことができない．そして意思決定の多く

50) W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory*, Vol. Ⅰ, p. 13.

51) Victor Zarnowitz, "Mitchell, Wesley C.," *International Encyclopedia of the Social Sciences*, edited by David L. Sills (New York: The Macmillan Co. & the Free Press, 1968), Vol. 10, p. 375.

52) Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought: The American Contribution* (New York: Augustus M. Kelley・Publishers, 1967), p. 249.

53) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 170.

54) Cf. William T. Waller, Jr. , "The Concept of Habit in Economic Analysis," *Journal of Economic Issues*, Vol. 22, No, 1, March, 1988, pp. 113-126.

55) Cf. John Dewey, *Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Psychology* (New York: Holt, 1922).

は，因習が支配する．意識的に熟考することによって，因習に干渉することはたまにしかない．因習が付与するのは，行動様式を保持するための適度な機構である．多大な情報を含むがゆえに広範に計算を行うが，われわれはそれに絶えず関わる必要はない．安定した不活性な性質を帯びており，それゆえ時代を通して基本的な特徴を維持し伝える傾向がある[56]．」

思考は信念を作り出す過程であり，信念の論理は心のなかで習慣を確立することに向けられる．習慣は，通則であるから，行為を規定する．学習過程は，経験に鑑みて，習慣を作ったり変えたりする過程である．習慣を作ろうとする性向は，典型的には認識に関する資質を効率的に利用する[57]．

環境に適応し，要求は満たされている．行動は，人間と人間を取り巻く環境に関連させてみることができる．ミッチェルは，デューイ同様，環境と人間との相互作用を重視し，行動と環境との間に実用的な均衡が達成されているとする．

ミッチェルは，人間と環境との相互作用として心理的過程を捕らえる．制度を環境によって決定されたもの，同時に環境を決定していくものと考えて研究する．つまり，制度やその機能を人間の内面的な要求によって決定されたもの，同時にこれらの要求を決定していくものとして考察する．人間が制度のなかでどのように行動するかを分析対象とし，行動を全体的に観察し，制度と行動の変化を規準として，刺激と反応との間の過程に要求を看取する．

探究は，社会的関係が帯びる性質によって決まる制度的な母胎のなかで進行し，その社会が提供する経験の脈絡に依存する．制度は，伝統，慣習，あるいは法的制約の運用によって，永続性のある習慣化した行動様式を生み出す．永続性ならびに習慣化があるから，世界は複雑で不安定であるにもかかわらず，社会科学をある程度実用的に利用することができる．制度は，人間活動に固定した様式，限界，規制，制約をもたらして，知識・情報を提供する．知識の概念・枠組みは文化規準・環境と関連している．制度ならびに文化の概念がどのように形成されるか，その枠組みを考察する．知識・情報は，制度が作り出し広めるから，社会的性格を帯びる．集団の習慣化した行動を確立する．知識・情報の土台は制度である．理論分析は，制度を表現し社会的態度を的確に述べる．

前述したように，ミッチェルは，社会状況・制度を考慮して，経済学者が進歩に対する刺激を見逃した理由を，経済学者の自己防衛の技巧と政治経済学を確立した学説とみなした点にみいだしている．これまでみてきた視点から，ミッチェルのあげた理由の背景に光明を投じてようやく，彼独自の制度主義の思想を本質的かつ首尾一貫して捕らえる手掛かりを得ることができよう．

---

56) Gilberto Tadeu Lima, “Conventions,” in *Encyclopedia of Political Economy*, Vol. 1, p. 143.

57) Laure Bazzoli and Véronique Dutrative, “The Legacy of J. R. Commons’ Conception of Economics as a Science of Behaviour,” *Institutions and the Evolution of Capitalism: Implications of Evolutionary Economics*, edited by John Groeneswagen, Jack Vromen (Cheltenham: Edward Elgar, 1999), p. 56.